

サイ・テク こむろ・たかし 知と技の発信

【209】

埼玉大学・理工学研究の現場

雑誌やポスターをスマートフォンを通して発展させて現実世界と仮想世界を融合させるようにしたカメラ映像の中にCG(コンピュータグラフィックス)で描かれたキャラクターが重なって表示されるアプリケーションを、存じでしょうか。このような技術を拡張現実またはオーグメンティッドリアリティ(AR)とい

■ライブ演出にも利用

雑誌やポスターをスマートフォンを通して発展させて現実世界と仮想世界を融合させるようにしたカメラ映像の中にCG(コンピュータグラフィックス)で描かれたキャラクターが重なって表示されるアプリケーションを、存じでしょうか。このような技術を拡張現実またはオーグメンティッドリアリティ(AR)とい

元々は人間がCGで作られた仮想世界に入り込むことができ、より強く得られます。また、プロジェクトを用いて、物体の表面に映像を投影し、色



こむろ・たかし 1972年生まれ。2001年3月東京大学大学院修了。博士(工学)。東京大学大学院助手、同講師を経て、11年4月から現職。専門は画像処理、ユーザーインターフェイスなど。

拡張現実が日常を変える

小室 孝 大学院理工学研究科 准教授

や模様をつけたりするような技術もあります。これはプロジェクションマッピングとも呼ばれ、最近では大きな建造物への映像投影が行われたり、ライブコンサートの演出に使われたりもしています。

■作業支援にも ARは現在、娯楽的な用途が多くを占めています。しかしながら、この技術はより実用的な場面でも利用が期待されています。その一つが作業支援です。工場内での保守点検作業などにおいて、作業者が眼鏡型のディスプレイをかけることで、作業の手順や部品の位置などを案内してくれるようなシステムが開発されています。

■操作性向上に利用 私はこのAR技術をモバイルスマートフォンで、ARの技術を用いて仮想キーボードを重ねて表示し、それを自分の手指を使って空中で操作できるシステムを開発しています。空中で操作することで、スマートフォンの狭い画面に制約されず、複数の指を用いたタイピングが可能となります。

■技術普及で変化 このように、ARは我々の生活を便利にしたり、仕事を効率化したりすることにも利用できる技術です。この技術が普及することで、近い将来、我々の日常生活が今とは少しだけ違ったものになるかもしれません。



空中でキーボードをタイピングしている様子

埼玉経済

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください
TEL 048・795・9161 FAX 048・653・9040
keizai@saitama-np.co.jp